

正岡子規と魯迅，周作人

木 山 英 雄

1

1926年3月18日、馮玉祥の国民軍と奉天系軍閥との戦闘に日本軍が介入したことに端を発して、日米英仏等八ヶ国名義で段祺瑞政府に突きつけられた最後通牒を恥辱とし、執政府に外交上の請願のデモンストレーションをかけた、学生を主とする5000の群衆が、國務院前で衛兵隊の発砲襲撃を受け、50人近い死者と150人余りの負傷者を出した事件は、北京の新知識人たちに深刻な衝撃を見舞った。それは、‘5・4退潮’と呼ばれる軍閥統治下の苦難の時期を、窒息しがちになりながら何とかしのいできて、しかも内部では早くもイデオロギイ上の分化過程をも表立させていた、文学革命や5・4運動以来10年にもならぬ新文化運動に対し、余りに不毛な環境、条件を、最後の思い知らそうとするものようであった。

この日、魯迅は自宅で、前年の女子師範大学騒動このかた彼の論敵となった『現代評論』派の陳源や、学生の反抗に加担したかどで一度は彼を教育部僉事の職から罷免した前教育総長章士釗を槍玉に挙げながら、「花なきバラの二」⁽¹⁾を書いてきた。そして、いつもの例の嘲笑的な筆調で断章を三つまで書き並べたところで事件の知らせを受けると、にわか筆調をあらためて、事件に関する六つの断章を書き加え、最後に‘3月18日、民国以来最も暗黒なる日に記す’と日附をした。この一連の激越な断章は、始めに、もはや「花なきバラ」などを書いている時ではなくなった、と書き出し、終りに、以上はすべて‘たわごと’にすぎぬと念を押しているように、文中の言葉を借りれば、‘血で書いた事実’の前に無力化せざるをえぬ‘墨で書いたウソ’として、つまりそういう思いをこらえながら、彼が民族の唯一の生機と信じていた青年の反抗に殺戮を以て報いた者へ、呪うような糾弾の言葉を投げたものであった。‘暗黒’の‘実有’をいい⁽²⁾、‘沈黙’の‘充実’をいう⁽³⁾彼が、言葉に対する不信と裏腹の熱い言

葉を記したのはこの一回に限らぬこととはいえ、夥しい‘青年の血’に五官の全部を浸されて我を失いそうになる心を言葉が辛うじて障礙する、とでもいうようなこの調子は、やはり異例に属した。そんな心を言葉が尽すことはできないという意味でも、それは障礙にちがいがなかった。そのような言葉として読むのでなければ、例の‘血債は同じ物で償わねばならぬ、長びかせただけ多くの利息をつけて!’といった章句などは、余りに人口に膾炙したあげく、歴史の大舞台で見栄を切ったようなものにされてしまうだろう。

しかし、続く3・18事件関連の文章⁽⁴⁾では、彼は‘雑感’家の面目をふたたび取り戻し、流血の事実とその意味を晦まそうとする政府筋や一部言論界のさまざまな言葉の詐術に対する言葉による批判の場に出ていった。この言葉のたたかいは、あたかも、「花なきバラの二」でまずは‘血’の前で筆を執る自身の焦燥に即して記したはずの‘墨で書いたウソ’という言葉のもう一つの含意を、事件後の政治的な脈絡の中に読み解いてゆくことに、彼の内心の解放がかけられてでもいたのかと思わせる。そして事実、彼はその過程で、事件の当日‘無聊な’文字を連ねていた最中に多くの青年が銃弾を身に撃ち込まれていたことを知った驚きに、‘人と人の魂は通い合わぬものだ’という表現を与えた時のいっそう深い焦燥をも、‘人と人の苦痛が通い合わぬ’ことに却って、‘殺人者’の見せつける死の恐怖にもかかわらず、歴史上の改革の犠牲者に後続が絶えなかった原因を見るような、別の思案に結びつけたし⁽⁵⁾、流血の息づまるような昂奮さえも、‘改革に流血はつきものだが、そうかといって流血がただちに改革に等しいことにはならない。血の使い方はたとえば金銭と同じで、ケチではいかぬが、浪費も大きな損だ’という理由で請願などではない‘別の方法による戦闘’を訴えるところまで、これを散文化した⁽⁶⁾。彼は、事件の衝撃を、外界との格闘の中で、そんな程度にまで対象化することができたわけである。とはいえ、女師大で親しく面識も交渉もあった学生のために追悼文⁽⁷⁾を草する段になれば、さすがにまた生々しい圧迫感が意識を溺れさせるように甦ってくるのを抑えることはできなかったが、しかしここでも、そもそも彼において独特に激しかった‘血’という直接性へのまともな反応が、自身がなお生きかつ書くために一刻も早くその圧迫から逃れたい思いと、その鮮烈さをみるみる色褪せさせてゆく現実への拒絶的な意志との相反する両面に分離して、‘惨憺たる人生’の‘淋漓たる鮮血’を取て正視する‘真の猛士’が、その血を時の力で洗い流し、凡庸なる人々をして‘淡い悲哀’の中に生を愉ませることにより、‘この人に似て人に非ぬ世界’の維持をはかる‘造化’に確執を構えるという、何か宇宙生命的な幽憤そして慷慨にまで昂揚した、詩的段落が挿まれることになった。そこに続けて、

犠牲者を記念する‘必要’のゆえに‘忘却の救い主’への呼び掛けを記した彼は、道理として、‘墨で書いたウソ’が‘血で書いた事実’よりもはかないとはかぎらぬということ、主張していたのでなければならない。さらに数日後、彼はその追悼文中の詩的段落を、「色淡き血痕の中に」と題する一篇の‘叛逆の猛士’頌に作りなおし、自分と具体的にかかわっていた文学青年たちの文化的沙漠の中でのいじらしい抵抗にいとおしむような連帯を表明した「まどろみ」というもう一篇と併せ、当時すでに山を越えて暫く筆の停まっていた連作散文詩『野草』の最後の作品として、発表した。

「色淡き血痕の中に」が示すような詩的ヒロイズムは、彼が清末民族革命の潮流の中で、衰微した老大文明の‘元氣’回復の夢を‘精神界の戦士’としての叛逆的詩人の出現に托して以来、そのごの経歴に応じた屈折や成熟を経ながらも、死ぬまで手放すことのなかった民族的自己批判の使命を、またその根底的な過激さを、気質の面から支えた要素として無視しようのないものである。それが今見たような、徹底した散文的たたかいと相表裏する形で、余蘊なくまた一つの時代的結晶をみせたことは、もっと複雑に内攻した作品が少くない『野草』にとって、めでたい締め括りだったというべきだ。もっとも、『野草』の制作じたいが作家にもたらした、内面における或る脱却の結果という意味では、それは成るべくして成ったものということもできるのである。

2

見貴のそのような一面を、人一倍醒めた目で眺めていたらしいばかりか、文章の理想の上ではおよそあらゆるヒロイックな力みやロマンチックな昂りから自由であろうと努めはじめていた弟周作人にとっても、3・18事件は決して生やさしい試練でなかったようだ。

周作人がこの事件について書いたのは、‘3月18日の後5日’の日附をもつ「3月18日の死者に関し」⁽⁸⁾が最初である。これは魯迅の「花なきバラの二」と同じ号の『語絲』に並んで掲載されたが、‘私は甚しく熱狂を欠いた人間だが、同時にいささか冷静をも欠いているので’云々と書き出し、いたずらな昂奮や当の政府に責任者の調査、処断を要求することの虚しさが明らかになり、かつ事件の刺戟による自分の心の乱れが収まるまでに5日の日子を要したことを前置いた上で、前途ある生命のこのような犠牲の哀悼すべき所以のみを平静に語ろうとするとともに、対蹠的な態度が示されている。結びには、殉難者合同追悼会に寄せた自作の挽聯が披露され、それには‘赤化’

〔という虐殺の口実〕と‘白死’〔むだ死に〕とを対にして、‘いわゆる革命政府と帝国主義はもとと同じものであった’とするような、言葉のあやによる政治的諷刺も見えるが、そうしながら、‘しゅせん私も「文字の国」の国民であって、文字によって死者を紀念することしかできぬのは慚愧の至りだ’といい添えたのも特徴的なところで、知的な手段と倫理的な動機との関係における不徹底を、それは示していたにちがいない。

彼が当時まだ、魯迅よりずっとまめに時事批判の筆を揮っていたのは事実であって、魯迅の場合のようには大がかりな調査も整理もされていない夥しい佚文の中にも、事件に関する発言が埋もれていないはずはないが、最近それらを丹念に発掘した上で力の入った論文を書いた新進の要約によると、あらまは次のようであった。

周作人は3・18事件の中で沢山の文章を書いたが、その批判の鋒先は、明確に帝国主義とりわけ日本帝国主義（「排日」）と北洋軍閥反動政府（「虐殺の感想」「府衛を恕す」）およびその御用文人（「陳源口中の楊徳群女士」）に向けられ、戦闘の方向は大體魯迅と一致していた⁽⁹⁾。

ここから、彼が、女師大事件に続き、3・18事件に際しても、魯迅と同じく『現代評論』の陳源と衝突を演じたのみならず、憎悪、攻撃の対象を徹底的に人間化してやまぬ（‘造化’さえも！）魯迅とは別の客観的な眼で、国内外の政治関係にまで批判を及ぼしていたらしいことが察せられる。ところで私たちは、こういった彼の発言の動機に関して、次のような表白を、もう一つの佚文に見ることができる。

3月18日くらい、北京には少なからぬ奇蹟が発生した。その結果は沈黙、沈黙、そして沈黙だ。これは〔奇蹟的な異常事の前で人は沈黙する他ないという上文の意味からすれば〕正しい、というのも、これが唯一つのふさわしい対処法なのだから。

だがこれは、さらに別のことをも意味しているのではないか、一つには恐怖を、二つには賛成を。われら忠良なる市民においてその比率や如何、となると話はむづかしいだろうけれども⁽¹⁰⁾。

沈黙は共犯、という論理が周作人だけのものだったとはいわぬが、少くとも、こういう反省的な動機が、周作人の発言を量的質的に特徴づけていたのは確かなように思われる。それだけにまた、彼自身の文章上の基準からするのちの取捨選択も、これらに対してはより厳しかったかも知れない。

ひきつづき、彼が文集に保存したものについてみると、二番目に‘大虐殺の月の末日、北京にて、殺傷された諸女士の紀念にするす’と日附された「新中国の女子」⁽¹¹⁾

がある。これは、事件現場における女子学生たちの男にまさる健気な働きと自己犠牲的な態度から受けた感動を、フェミニスト周作人の面目充分な婦人論に出したものだ。そして最後に、5月中に書いた「死法」⁽¹²⁾と題する奇矯な一文がくる。

「死法」は、人のさまざまな死に方の得失を銜学漫談風に評定してゆき、けっきょく銃撃によって瞬時に往生させられるのが一番だ、という結論に落ちる。終りにようやく肝腎の事件に筆が及ぶ部分も、こんな調子である。

3月18日に中法大学生胡錫爵君が執政府で殺され、学校で追悼会が催された折、私は次のような対聯を送った。いわく、

「什麼世界，還講愛國？」

如此死法，抵得成仙！」

〔かかる世界に何の愛國か、かく死んでは昇仙疑い無し〕

この後の一聯は実にわが衷心よりの頌詞なのだ。もし美中に不足ありとするなら、弾丸が大きすぎて、一塊の皮肉を削ぎ去ったことだけが少し目触りなので、鳥打ち用の鉄粒みたいな奴を発明して、命中の痕が銅線状にでもなるようにできたら、申し分はない。この程度の発明はさほど手間暇を要することでもなかろうが、それでも成就するまでには、例のヨーグルトのメチニコフ (Metchinikoff) 医師がいう人間の「死欲」の方も充分に発達しているにちがいないから、かくて「両々相俟ってめでたし」ということにあいなろう。

上のような順序にしたがって読んでくると、殊更冷静を心懸けて、事件が強要するあらゆる昂奮から自分の言葉を守ろうとした彼が、「死法」のような形ではじめて、虐殺に我を忘れて憤るという、これも争われぬ彼自身の真実を文字にとどめることができた経緯がわかるようである。ほかにも程度こそちがえ繰り返したであろう同種の経験を、彼は「悲憤絶望をユーモアに托す」という好みの方法に意識化したのだったが、「死法」はそのやり方の見るもあらわな一例として、注目に値するものだ。この文章の附記で作者は「上文に述べたところは、幾分は冗談だが幾分はそうでない」と、蛇足のような断りを述べているが、それはこのような表現に慣れぬ読者から見当外れの投書を受け取ったりした前例⁽¹³⁾に鑑みてのことであろう。そうまでして、血なまぐさい虐殺事件に手の込んだ諧謔を弄したことの裏には、その政治的はね返りに対する警戒はもとよりのこととして、余りに悲観的な環境、条件を逆用してでも、新文学の園地を確保しようとする、文学上の果敢なたたかいかいもあったわけである。こういう奇矯な調子を、彼はやたらには文章に出さなくなってゆくけれども、彼をスウィフト

や李贄に深く結びつけていたその性向は、最後まで無くなりもしなかった。

3

「死法」の附記には、もう一つ、日本の私たちの注意を惹く断りがある。

私はこの文章を書くのに、少しは正岡子規の俳文「死後」から暗示を受けているかも知れない。中の言葉も趣意もみな私自身のものにはちがいないにしても。

また、彼は翌年「死法」を『淨瀉集』に編入した際、くだんの子規作俳文「死後」が、張鳳挙の手で漢訳され、『沈鐘』第6期に載った旨をさらに注記したが、この頃非常に親密だった張鳳挙との関係や訳文発表の時期、それと注記そのものからして、その翻訳は、周作人本人かまたは彼の「死法」とその附記から何らかの形で促されて、したことだったろうと想像される。『沈鐘』は、さきにふれた『野草』最後の一篇「まどろみ」の中で、魯迅がその名を挙げながら深い愛情を表明したところの小さな同人誌なのであるが、その当該号に載っている張訳「死後」には訳者の簡単な解題も附せられていて、中に次のような言葉が見える。

本篇は〔アルス社版〕全集第10巻から訳出した。どこといって特に良いものともいえないけれども、ここから詩人の晩年—36才の生涯にも晩年があったといえるなら—の心境一斑を窺うことができる。というのも、これは死ぬ1年前の1901年2月に書いたのであるから⁽¹⁴⁾。

原作に対する訳者自身の執心がさほどでないだけ、周作人側から促されたとする推測が本当らしくなろうというものである。

正岡子規の小品文「死後」⁽¹⁵⁾は、宿痾のカリエスのために何年も病床に釘づけにされ、張鳳挙もいうとおり、36才の若さで死んだ子規が、その1年ほど前に、自分の死後に関する観察を綴った、さまざまに面白い文章である。自分のような長病人は度々死を考える機会があり、またそれに適した暇もあるので、‘死といふことは丁寧反覆に研究されてをる’が、‘死を感じるには二様の感じ様があり’、‘主観的’な恐怖煩悶に対し、‘客観的’の方は余程冷淡に自己の死といふことを見るので、多少は悲しい果敢ない感もするが、或時は寧ろ滑稽に落ち独りほゝゑむやうな事もある’というような口上に続いて、‘去年の夏頃’と‘夏も過ぎて秋も半を越した頃’との両度にわたる‘客観的

の方’の体験の経緯、内容が語られる。初めのは、わが身の死後の遭遇として、土葬、火葬、水葬、ミイラ葬などの実感上の得失をつぶさに‘観察’した話であるが、西洋の俗謡や風俗画を引き合いに出したり、小説風な想像につい身が入ったりして、いわば葬法漫談の趣をも帯びる。後のは、死の予感に煩悶していた自分がいつのまにか死人となって、村外れの小さな墓地に葬られるところをあれこれ‘考へて’ゆくうちに、‘今迄の煩悶は痕もなく消えてしまふて、すがすがしいえゝ心持になってしまふた’次第を活写する。

けだし周作人は、子規の「死後」にいう、死の‘主観的’‘煩悶’から‘客観的’な‘冷淡’さては‘滑稽’への転換のことや、殊にその前半部の己が葬法の妙に具象的な評定だの彼自身が本来得意とするところでもある民俗誌風の語り口だのに強い興味を惹かれていて、そこから「死法」のような形式による反語的顛倒の‘ヒント’を得たのであったろう。そのいきさつを洩らした上述の附記で、文中の言葉も趣意も彼自身のものだといっているのは、時代と国情の懸隔からして、ほとんどそうであるほかなかったにちがいないけれども。

周作人が予て子規に親しんでいた事実は、いろいろと彼自身の文章から知ることができる。いったい、しばしば日本文学の翻訳をも手がけながら、しかし総じては、有益なものは黙って吸収し活用したという印象のまさる魯迅とちがいで、彼には日本人と日本文化に関する啓蒙を使命の一つに自覚した者のような働きぶりがあり、それゆえこの対象への愛情と批難の相剋に苦しむことが少くなかったわけでもあった。とくに新文学運動初期には、同じく‘平民’的といっても中国近世の俗文学とはずいぶん異質な、こまやかなる‘人情味’によって彼の心に叶った江戸文芸や、一足先に‘欧化’の実を挙げて彼の注意深い観察を惹いた明治文学を、運動の見地から紹介した仕事が多くあり、それらの中で、俳句、短歌、散文の改革者としての正岡子規の功績に言及するのを怠ったことがない⁽¹⁶⁾。それくらいは明治文学史のイロハのうちでもあったろうが、しかし、彼が繰り返し語っているような、留学時代に『ホトトギス』を愛読した思い出や、その創始者に対する特殊な親しみというもの、そこにこもっていたはずなのである。回想の一例を引いてみる。

私は丙午〔1906、明治39〕の年に東京へ行った。その時子規はすでに亡く、雑誌ホトトギスは高浜虚子が編輯に当たり、俳句、写生文、小説が発達を遂げていた。私の書架には今もその9巻1号が残っている。夏目漱石の「坊ちゃん」が発表された

のはこの号で、「吾輩は猫である」の第10回も巻頭に載っていて、当時の様子がうかがわれる。……その頃東京で写生文と自然主義の潮流に触れたのだったが、自然主義の理論には感服させられたし、写生文は実績に観るべきものがあった。私はホトトギスの俳句はわからなかったけれど、かわりに散文をよく読んだ。漱石、虚子、文泉子から長塚節までの著作は、みなはじめにそこで見つけて興味を抱いたのであった⁽¹⁷⁾。

周作人はまた、その頃結婚したばかりの羽太信子やその弟の重久たちと田端へんへ魚釣りに出掛けた日のことを綴った300字足らずの短文がたまたま晩年まで保存されていたのを披露し、これも『ホトトギス』流の写生文を真似て書いたものだったことを回想している⁽¹⁸⁾。

事はこのようであるから、彼が評論や翻訳の他には、新詩の試作を除いてまだ創作の実行に入っていなかった段階で、おそらくは自身の資質と中国文学固有の伝統に対する洞察から、いちやく‘詩と散文のかけはし’としての‘美文’の有望さを論じた⁽¹⁹⁾時も、子規派の写生文が念頭になかったとは思われない。それ以前の中国に余り用例を見ず以後も‘散文’や‘小品文’にとって替られた、‘美文’なる名称さえ、その時の議論がもっぱら英文学の例を引いてなされているところから、Belles lettresを直訳したとみるのがいちおう自然だとしても、ひょっとして、子規が写生文の理想を宣明した「叙事文」⁽²⁰⁾中の用法を踏襲したのではないかと、とも考えてみたくなる。

もっとも、この当初の抱負はその後段々修正されて、反道徳主義の道徳家を自任する人にふさわしく、狭義の文学性からも自由な、独自に徹底した散文とともに彼は生きることになるが、そういう文章観を固めたえた段階で、彼が子規を次のような位置に据えて評価したのは、興味深いことだ。

文章をいえば、根岸派の唱えた写生文も昔から好きで、正岡子規のほか、坂本文泉子や長塚節の散文を、今も愛読している。もっとも、このごろ高浜虚子の「新俳文」という文集と山口青邨の「花のある随筆」を読み、うまいことはうまいと思っただがあまり満足がゆかなかった。風体ととのって神気を欠くとでもいうのであろうか。古来の俳文はこんなではなかった。たいていはもっと中身があり、おどけたユーモラスな文字の中にも、誠実な深い思想や経験をのぞかせていたものだ。芭蕉、一茶から子規に至るまで、みなそうだった。横井也有のように、根から太平の逸民で、終始微笑をうかべながら「鶉衣」一部をものした例もないではないが⁽²¹⁾。

4

子規の「死後」は、しかし、もう一つの作品とも関係がありそうに思える。標題も同じい魯迅作「死後」がそれである。

魯迅の「死後」は、『野草』の中にあり、小冊子ながら多様な作柄を示す散文詩集中でも特殊に小説がかった、これも愉快的な作品である。一篇は、自分がどこかの街頭で死んでいる夢を見た、というところから書き起こし、身動きも目を開けることも叶わぬその死後の自分が、野次馬や虫や墓堀人夫や古本屋の小僧からいいようにあしらわれたあげく、にわかに痛恨のような思いを発して生き返るまでを記す。そして『野草』全部のおのずからなる配置の上でも、先立つ夢の系列がここで打ち切られる格好になっていて、子規とはまた別趣の‘死の感じ様’を含んで或いは重苦しく、或いはむつかしく緊張していた一連の夢から世俗の日常へ醒めて出るのにふさわしい、散文的に快活な感性と思考を、もういけなくなった死人がふりまくところに、集中異数の滑稽味さえ湛えている。このような、死後の客観的観察という趣向に、まず子規作「死後」との目立った類縁が認められる。それをもう少し詳しく見ると、魯迅の方の主人公は、自分の死に気づいた途端に恐慌を來たして、いう。

生前おれは、人死んで運動神経ばかりが駄目になり、知覚はなお残るとしたら、まるごと死んでしまうのよりもどんなにか恐しかろう、とそう冗談に考えてみたことがあったけれど、なんとそれがまことになり、今や空想を地で行く破目になったわけか。

こういう変則的な死に方と、これより三ヶ月ほど前に書かれた「春末閑談」⁽²²⁾の冒頭に見える‘腰細蜂’^{じがばち}の話との間の連想関係は、誰の目にも紛れのないところだろう。そこでの魯迅は、詩にいう‘螟蛉ニ子アリ、蜾蠃コレヲ負フ’の蜾蠃すなわち腰細蜂が、螟蛾の幼虫に毒を注射して、生きてはいるが動けぬ状態に陥れ、そこへ自分の卵を産みつけて孵化後の吾が子の餌食に供するという、いかにもあざとい習性を、専制統治者の愚民支配に擬えて‘閑談’したのであったが、「死後」の主人公の上のようになっていたらくがこの憐れな芋虫の境遇に通じているのは見やすいことだ。しかし、それを、子規作「死後」の例えば次のような言葉が、いっそう剗切に説明していると看做すこともできるのである。

客観的に自己の死を感じるといふのは変な言葉であるが、自己の形体が死んでも自己の考は生き残ってゐて、其考が自己の形体の死を客観的に見てゐるのである。

そうすると、「春末閑談」の芋虫の譬えが、‘夢’という想像の中で自分が死んでみる「死後」の着想に転じたきっかけは、実は子規の「死後」がもたらしたのだったかも知れぬということになり、また、そう考えながら読み比べてみると、二つの「死後」の間には、死人の遭遇の細部にも、煩を厭うて一々は挙げぬが、相似たふしぶしがあるようである。

魯迅が子規の「死後」を読んだ事実の有無に至っては、彼の全集に証拠を求めても、問題の魯迅作「死後」以外にそれらしいものが見当らぬとはいへ、すでに子規に親しむこと久しい彼の弟が、しかも通り一遍ならぬ関心とともに「死後」を読んでいたのであってみれば、その蓋然性は相当に大だということになる。『野草』の「死後」が書かれた1925年7月現在、兄弟はすでに決絶して、兄の方が八道湾の共同の邸を出てしまつてから2年近くになるという状態にありはしたが、絶交の寸前に兄弟二人で『現代日本小説集』⁽²³⁾を編んだような事実もあり、まして、両人の関心事は時期を溯るほどより一体的に接近し合う関係にあったのだから。

5

子規は世にいう写生文の唱道に際し、‘写生’‘写実’‘実叙’‘具象的叙述’などの語を用いたが、それはあくまでも‘美文’すなわち‘面白き文章’つまりは作品の上のことであり⁽²⁴⁾、したがって彼らの目指した新しい散文は、‘ただ触目の光景や事実の漫然たる記録’でなく、‘感興のクライマックス’としての‘山’をも要求するようなものであって、子規庵恒例の文章会がこれに因んで‘山会’と称せられたことは、近代散文草創にまつわる語り草として知られるとおりである⁽²⁵⁾。そして、「死後」一篇においても、すこぶる写生的に書かれた情景、事態が当の筆者の死後に属することの奇異さに、そのいわば感興上の‘山’が意識されているのは確かなようである。

ただし、周作人の「死法」がそれから趣向の‘暗示’を得たとか、魯迅の「死後」が同じくそれに触発されて‘夢’の中で自分が死んでみる着想を得たかも知れないとか、いうのと同じ意味で、子規の「死後」にも、知的に凝らされた趣向や、たとえばんなにとりとめない空想の中でにせよ、死んでみるというべきほどの作意が認められるわけではない。この点に関しては、むしろ何の趣向、作意をも容れない当り前さ

で死に入ってゆくところに、この作品の主な特徴があるとさえいえるのである。じっさいのところ、‘然るにどういふはずみであったか此主観的の感じがフイと客観的の感じに変わってしまった’と文中にもいう通りだとしかいいようがないので、とくに二度目の体験の部分にそれが顕著である。一度目の方は、まだしも各種葬法を逐次とりあげ、時に道草も食いながら、空想を逞しくしたというように読めぬことはないが、それも、二度目のと同じ‘客観的感じ様’の例とされていることによって、その妙に実感的な細部の生々しさに得心がゆくのである。二度目の体験は、こんなふうに書かれている。

自分はもう既に死んでゐるので小さき早桶の中に入れられてをる。其早桶は二人の人夫にかゝれ二人の友達に守られて細い野路を北向いてスタスタと行ってをる。其人等は皆脚絆草鞋の出立ちでもとより荷物などは少しも持ってゐない。一面の田は稲の穂が少し黄ばんで畦の榛の木立には百舌鳥がせはしく啼いてをる。早桶は休みもしないでとうとう夜通し歩いて翌日の昼頃にはとある村へ着いた。其村の外れに三つ四つ小さい墓の並んでゐる所があって其傍に一坪許りの空地があったのを買い求めて棺桶は其辺に据えて置いて人夫は既に穴を掘ってをる。其内に附添の一人は近辺の貧乏寺へ行って和尚を連れて来る。やと棺桶を埋めたが墓印もないので手頃の石を一つ据えてしまふと、和尚は暫しの間回向して呉れた。其辺には野生の小さい草花が沢山咲いてゐて、向ふの方には曼珠沙華も真赤になってゐるのが見える。人通りもあまり無い極めて静かな瘦村の光景である。附添の二人は其夜は寺へ泊らせて貰ふて翌日も和尚と共にかたばかりの回向をした。和尚にも齋をすゝめ其人等も精進料理を食ふて田舎のお寺の座敷に坐ってゐる所を想像してみると、自分は其場に居ぬけれど何だかいゝ感じがする。さういふ工合に葬られた自分も早桶の中であまり窮屈な感じもしない。

実は、子規は「死後」より前にも、死後にかかわる作品をもう一篇書いている。題して「墓」⁽²⁶⁾というそれは、‘落語生’の署名で発表しただけあって、一段と滑稽な語り口で、おもに死後埋葬された自分の墓の下で年を経ながらの感懐を述べる。この死人は、墓地の花が盗まれる公德心未發育な明治社会の経済的根拠を論じ、生前のノロケ癖を披露し、隣の華族か何かの墓所の不当な広さを難じ、さては‘市区改正’‘支那問題’から‘藩閥政治’のその後までも案じた末に、‘オヤオヤ馬鹿に寒いと思ったら、あばら骨に月がさしてらア’といった狂句で長い口説を締め括る。これを、「死後」とほぼ同時に書いた「初夢」⁽²⁷⁾が、急に元気になった体で正月の雑煮を祝い、仲

間の家を年始に廻り、新橋から汽車で大阪を通って郷里の松山へ挨拶に赴き、いつのまにか富士山に登って下りる途中で夢が醒めるまでを、おどけた会話のやりとりで綴っているのなどと考え合わせれば、いかにも病床の人にふさわしい夢想的な饒舌ということで片が付きそうにもあるが、しかし「墓」における死への入り方も、やはり夢想、空想とは紙一重の差で、あの‘客観的の感じ様’の独特な趣を帯びているようだ。

それは、現実の死の瞬間もまたこんなふうにやってくる、といった類の想念とも関係がない。関係があるのは、子規における死の‘客観的の感じ様’なるものの奇態なあり方であって、それが文学的な感興や哲学的想念とは直接かかわらない、或る種の心的異変に発していたことを、かの特徴的趣は反映しているのにちがいない。その異変に、幻覚、覚醒夢、離人体験等々の診断を与えても、どれだけ厳密な規定になりうるのか、素人にはわかりかねることであるが⁽²⁸⁾、自分の死後を経験するという点に限れば、かなり典型的な状態ではないかと思う⁽²⁹⁾。子規自身が、‘主観的の方は、病気が重くなったとか、俄に苦痛を感じて来たとか、いふ時に起るので、客観的の方は、長病の人が少し不愉快を感じた時などに起る’というように、病勢との因果関係に支配された受動的な状態としてこれを説明し、かつ、‘主観的の方は普通の人によく起る感情であるが、客観的の方は其趣すら解せぬ人が多いのであらう’というくらいにはその異常性を自覚していることに注意すべきである。子規のような若く鋭敏な長期重病人の、それ自体が異常といえれば異常に近い病床暮らしの中で、そんな異変が正常事のように起ったとしても、何の不思議もなかったではあろうが。

子規に関する評論、研究史などに暗い私は、「死後」や「墓」がどんな読まれ方をしてきたのかを詳にしないが、「死後」には相当の興味を覚えていたらしい斎藤茂吉が、とりわけ写生的なあの野辺送りの段落に触れて、次のような強い調子でこれを賛えたのも、同じ趣きに感じてのことにはちがいがなかったろう。

同じ結核性の病気に罹ってゐても、網島梁川が仏を見たり、高山樗牛がニイチェから、日蓮に帰依して感激に満ちた超世間的の文章を発表してゐたのに比して、いかに子規の病牀生活が非宗教的で、平凡で、現実的、娑婆的、此岸的であるかを見よ。

.....

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる 芭蕉
糸瓜咲いて痰のつまりし仏かな 子規

割合に意識の濁らなかつた芭蕉が、一句をつくれれば、夢をいひ、枯野をいふ。麻醉剤のためにうとうとし勝ちな子規が辞世の句をつくれれば、仏と詠じて居りながら、「痰のつまりし」といふ。この娑婆的なところが、子規文学の特色でもあり、写生の妙諦でもある。そして、この娑婆的、現実的現象の追尋がおのづからにして永遠に通じ、彼岸界にもつながるので、子規が残した傑作の幾つかは即ちそれなのである⁽³⁰⁾。

茂吉が子規の短歌革新の後を承け、歌論には限定されていなかったその写生の説を、中国、日本の画論類にも溯って吟味し直しながら、「実相観入」という作歌の根本理念にまで徹底させたことは、ここにいうまでもない。そういう茂吉流の理念化の跡がこの論評にも濃厚に認められる。それだけに、日本文学圏内の者には身に沁みかつよく思い当たる形で、「平淡」「現実的」に自然的生を写す或るひたぶるな情熱のあり方を明示しているものの、また、ともにリアリズムへの意志に導かれて近代的脱皮を経験したといえる中国文学が、この面ではあまり似た様相を示さなかつたことにまでも思いは致させられるものの、このようには演繹しきれぬ「死後」の特徴が残るのも、また確かである。つまり、茂吉は、あくまで「平淡」「現実的」に対象を捉えようとする写生の方法ならびに情熱が、その「妙諦」において、「娑婆的」「此岸的」に透徹した死生観と相表裏するということの「永遠」的「彼岸界」的な、つまりはほとんど宗教的な意味にまで思いを馳せながら、「死後」を歎賞しているわけであるが、子規その人は、生も死も、健康も病氣も、うつつもそらも併せ生きる底の、いわば天真なる全人性、または彼が「情欲」と自称した旺盛なる好奇心の赴くままに、奇態な死後の見聞さえも実に公平に写生したまでではなかつたろうか。その体験を、彼が一方では病勢に因果づけられた一種異常な事態と認識していながら、しかもなお、うつつの「主観的」恐怖や煩悶と対等な「客観的」体験として、「反覆丁寧」な「研究」のうちに入れて憚らぬことが、何よりの証拠でないだろうか。あるいは逆に、不思議な心の作用によって何度も自分の死後に親しんだ体験が、死という断絶をやわらげ、彼の死生観に或る融通的な感覚をひそかにもたらし、結果として、死と密接に隣り合って生きた、この精神健康児の非宗教的な救済に寄与するところさえあったのではなかつたろうか。

6

魯迅の「死後」に、標題と趣向と細部にわたって、子規作「死後」からの影響をう

かがわせるふしがあるといっても、ここでは、そのような作意を立て虚構を逞しくする想像的意志の積極性により、子規のとはだいぶ異った境界がつくられてゆく。子規のには、自分の死後がつぶさに‘客観’される珍しさに独り興じる趣があったが、魯迅のは、死後は死後らしくすでに何事からも自由であるはずなのに、外界の方から一うるさく踏み込んで来るとでもいいかげで、死人もその都度それらにまともに反応して、上機嫌になったり、苛立ったり、憤激したりし、とどのつまりは‘考えが違って’生き返ってしまう。この最後のはずみになる古本屋の小僧とのやりとりが殊に妙である。小僧は‘こんちわッ、先生、お亡くなりで?’などといいながら上りこんできて、ひごろ書齋へ商品を届けに来ると同じ剣幕で‘明版’の‘黒口本’のと能書きを並べ、ここだけはどういうわけか目を開けて、荒木の粗末な棺の内側を確認している死人が、とんだ場違いをたしなめても、相手は‘構やしません、だいじょうぶでござんすよ’という調子でてんで取り合いもしない。そのばかりしさが、たとえばゴォゴリ風に怪奇で、なんとも可笑しい。要するに魯迅は、このようにして自分の死をことさら無聊な外部の刺戟にさらしてみているわけだ。外界のもろもろは、子規のような平淡克明なまなざしで写されはしないが、しかし‘国民性’への愛憎激しく表裏する批判的執着により要処を歪め誇張されて、主人公の死人と劇的に対立せしめられている。それでこそ、彼を生き返らせるに至った思いにも、己れの生前と死後のていたらくが、自分の安楽を願ってくれる‘友だち’と自分の滅亡を望む‘かたき’とのいずれの期待をも充たしてはいなかった、というように、現世の社会的抗争がありありと刻印され、そして生き返る彼は、まさにその葛藤の中に生きる根拠を見出したといわぬばかりなのであろう。

振り返れば、『野草』の中のこれに先立つ死は、しばしば主観と客観のむつかしいもつれにつきまとわれていた。つまり、生成してやまぬものをあくまで見定めようとする事の矛盾や、自然としては客観的な死に、当の瞬間には消滅せねばならぬ主観として立ち向かう時の撞着の意識があった。そして、傷ついた反抗者の自己破壊的な衝動をそこまで追いつめていった象徴化の跡は、徹底的に自己であろうとしたあげくの自己なる幻からの脱却過程をもその中に含んでいたとはいえ、これらのあとに「死後」のような一篇が置かれたことで、『野草』がどれだけ豊かになったことだろう。

なお、私は当初、『野草』の「死後」の発想の遠い源流の一つに棺桶や墳土の中から世間を眺める陶淵明の「挽歌」や、その背景にあったとおぼしい古代民間葬式歌の伝統といったものを考えていたのだったが、子規の「死後」に見られる典型例から、さらにそれらを発生的に了解する手懸りをも得たような気がするが、どんなものか。

3・18事件は、前の年に上海で起こった5・30事件とともに、次に来る激動の時代を予告するものであった。翌1927年の国民党右派による4・12‘清党’クーデタは、北伐国民革命の‘勝利’が、実は国・共両勢力の凄惨な内戦の開幕にすぎなかったことを示し、そこに登場した左翼の革命文学論をめぐって、新文学界は全盤的再編を促されることになる。げんに、3・18事件にあれほど激しく反応した魯迅は、その年のうちに北京を脱出して、革命文学派との論戦に始まり、左翼作家連盟指導者としての政治的悪戦苦闘へと続く、後年の波瀾が待っていた南方へ去らねばならなくなり、北京でなお暫くの後退戦を継続させた周作人は周作人で、やがて次第に反時代的な韜晦姿勢を強めながら、革命文学論の教条的功利主義と正統派古文の道統主義とを串ざしに批判するような立場を固めたのであった。

そういう歴史的事件の前後に彼ら兄弟が書いた各一篇の小品に、明治30年代に死んだ正岡子規の一文がたまたま影を落としたからといって、その因縁自体に格別の時代的意味を見つけることはむづかしそうである。何か意味があるとすれば、差当り三つの作品をつないでいる死の奇想に即して考えるほかはない。

魯迅の「死後」と周作人の「死法」が、子規の「死後」に趣向を借りたとしても、彼らの動機には、時代と国情の懸隔を反映して、子規の原文とは似もつかぬ社会性ないし政治性が孕まれていたことはすでにいったとおりであるが、しかし、彼らとて、重病人子規のように自身の単純素朴な死と痛切に向かい合う経験から、全くかけ離れたところにいたわけでない。魯迅があと10年で彼の生命を奪うことになる肺結核で最初に倒れたのは、‘八道湾を追出された後と、章士釗とけんかした後’⁽³¹⁾のことだったというから、彼は『野草』を書いていた間じゅう、病死の予感をも抱いていたにちがいないのである。また周作人は、すでに1920年の暮れから結核性の肋膜炎による入院や西山碧雲寺での療養生活を経験し、「過ぎ去った生命」⁽³²⁾のような病中詩を作ったり、そのごも「死の黙想」⁽³³⁾という文章を書いたりしていた。

「過ぎ去った生命」といえば、‘この過ぎ去ったわが三月の生命はどこへ行ったのか’に始まる口語詩を、当時魯迅に見せたところ、‘彼は低い声で、ゆっくりと、まるで何かを通りすぎてゆくのを感ぜながらのようにこれを読んだのが今も目に浮かぶ’⁽³⁴⁾という周作人晩年の回想が印象深い。そして、のちの『野草』の「題辭」にいう‘過ぎ去った生命はすでに亡い’云々の感慨が、この弟の病中作と同じ趣意によって、集中の一篇一篇とともに死んだ己れの生命にかかわるものであったことを、疑う必要はないと思う。

要するに‘5・4退潮’から3・18に至る‘暗黒’の日々に耐えながら、大きな時代的

転機を迎える準備を重ねていた彼らは、ともに自然的肉体の危機をも自覚しながら、それぞれに死の意識にまで踏み込んだ内面の葛藤を演じていたわけである。この過程は、新文化運動の啓蒙主義的楽天性一般ないし開化期のそういう要素への折れ合いに対する反省を余儀なくさせ、作家たちに新文学血肉化にかかわる思考上、制作上の‘彷徨’を強いた点で、実に意義深いものであったと私は考えるのであるが、そんな課題に立ち向かう誠実さにかけても、彼ら兄弟が傑出していたことは確かであった。目下の問題に関連するその一例だけを挙げると、キリスト教的ヒューマニズムというものがあればそれに最も近づいた一人といえる周作人が、上記「死の黙想」で、死の崇拜や神秘化とは無縁な自身の‘唯物論’なるものを確認しているように、近代の理想を、深く身についた固有の生活感覚の上に据え直そうとする努力が、そこにある。魯迅の方は、たぶん最初の文学的覚醒の時に決定されてしまった歴史に対する位置関係の特異さと、また或いはその詩人的本性とから、周作人のような形で概念上の修正を繰り返す必要には出遭わなかったらしいが、彼が主にはニイチェを通して傾倒した意志の哲学が、‘失敗’の自覚と一つになって、‘復讐’の衝動を内攻させる時、それを詩的に対象化しながら、生活の現実との新しい緊張を次々に拓いてゆくことができたのは、根底において同じ‘唯物論’的な感覚のなせるところだったように思われる。

このような‘唯物論’が、意志の衝動としてであれ、暴力の恐怖としてであれ死が人の主観性を食物にして絶対的な様相を現わしてくるのを、方法的に相対化するところにすぐれた意味での諧謔が伴いえたことは、彼らの「死後」や「死法」が実地に示すとおりであるが、もっと素朴に死を苦しんだ子規が、何かのはずみに体験した余りに当り前な死後の感覚や情景を‘客観’として受け入れ、そこに伴う‘滑稽’の趣に興じもした時、資質として示したのは、やはりその‘唯物論’に似たものでなかったろうか。子規のそういう資質は彼の病苦の記録の至る所に認めることができるが、それは、手紙のついでに記された、つぎのような心身衰弱の訴えにさえしっかりと息づいている。

小生近時の衰弱は身体と共に精神上に及び言語道断の事に候体が痛むとて泣き昔を想うて泣き未来を想うて泣く或時は死ぬるのがいやで泣き或時は死にたくて泣く併し泣きながら猶大食致居候⁽³⁵⁾。

自然主義以後の日本文学が、心身の苦痛や不安の表現に関して、自我の主観性にずっと手放しになっていったことを思うと、現実の正視に耐えうる強い精確な言葉を求めて、それぞれの国の近代文学の創始を荷った子規と周氏兄弟の間の小さな文学交流

の往事にも、それなりの時代的意味を考えさせるところはあるようだ。

注

1. 「無花的薔薇之二」『華蓋集』。
2. 『兩地書』4。
3. 「題辭」『野草』。
4. 「死地」(3.25)「可慘与可笑」(3.26)「空談」(4.2) いずれも『華蓋集』。
5. 「死地」。
6. 「空談」。
7. 「紀念劉和珍君」(4.1)『華蓋集』。
8. 「關於三月十八日的死者」『澤瀉集』。
9. 錢理群「試論魯迅与周作人的思想發展道路」注69『中国現代文学研究叢刊』1981年第4期
10. 「我們的閒話」8『語絲』第80期。
11. 「新中国的女子」『澤瀉集』。
12. 「死法」『澤瀉集』。
13. 「碰傷」「編餘閒話附」『談虎集』上卷。
14. 『沈鐘』半月刊第6期(1926.10)は日本で見られぬ故、北京大学留学中の尾崎文昭君に調査を煩わせた。
15. 『ホトトギス』第4巻第4号。講談社版全集第12巻。
16. 「日本近三十年小説之發達」(1918)「日本の詩歌」(1923)「日本の小詩」(1923) いずれも『生活與藝術』。
17. 「如夢記」『藥堂語録』。
18. 『知堂回想録』89。
19. 「美文」(1921)『談虎集』上卷。
20. 『日本』明治23.1.29, 2.5, 3.12。全集第14巻。
21. 「冬天的蠅」『苦竹雜記』。
22. 「春末閒談」『墳』。
23. 1923.6刊。新版魯迅全集第11巻所収の周作人宛書簡数通(1921.6.30, 8.25, 8.29, 9.17)に作品選択上の意見交換の跡がうかがわれる。
24. 「叙事文」。
25. 河東碧梧桐『子規の回想』続篇17。
26. 『ホトトギス』第2巻第12号。全集第12巻。
27. 『ホトトギス』第4巻第4号。全集第12巻。
28. 私の識るある婦人は、いわゆる心因反応の発作後に強い死の恐怖に襲われたりしたが、その頃次のような状態を体験したという。'私はもう死んでいました。外で遊んでいる子供たちの中で息子がひどく淋しそうな様子をしているので、母親が死んでも、こんなに近くにいるのだから悲しむ必要はないのだよ、とささやいてやるのに、彼には聞こえません。可哀想に、とは思ったけれど、焦りや苛立ちとは全く別のとても穏やかな気持で、こうして見守っ

ているだけで充分なのだ、死ぬとはこういうことだったのか、と私は独り納得していたのでした。

また、レヴィ・ブリュルが紹介している未開社会の例で、自分の死後の葬儀の様様や、それによって死を納得し‘靈魂の国’へ行く決心をするに至ったいきさつを語ったという、‘蘇生した’巫医の体験も、死に関する呪術的な観念や儀礼を別にすれば、子規の「死後」と余りによく似たところがあるのに驚くほどである（山田吉彦訳『未開社会における思惟』第3部第8章）。

29. アンリ・エーは、‘いかなる臨床家も疑いえぬ事実’の一つに、‘錯乱発作、夢幻状態、妄想ないし幻覚体験、離人症状態’等が‘臨床的には一つの連続として示され、これを分離しようとすれば人為的にならざるをえない事実’を挙げている（大橋博司訳『意識』I第2部第1章）。
30. 「正岡子規」其五。『正岡子規』。
31. 1936. 9. 3 母親宛書簡。全集第13巻。
32. 「過去的生命」（1921）『過去生命』。
33. 「死之黙想」（1924）『雨天的書』。
34. 『知堂回想録』135。
35. 明治34. 1. 4 菊池仙湖宛書簡。全集第19巻。